



TITLE:

<學界展望>唐末・五代政治史研究
への一視點」

AUTHOR(S):

大澤, 正昭

CITATION:

大澤, 正昭. <學界展望>唐末・五代政治史研究への一視點」. 東洋史研究
1973, 31(4): 575-583

ISSUE DATE:

1973-03-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/152871>

RIGHT:

唐末・五代政治史研究への一視點

大澤 正昭

七〇年度の魏晉南北朝期研究をふり返つて、菊池英夫氏は「總括の季節」が訪れている、と指摘された（一九七〇年の歴史學界―回顧と展望― 史學雜誌80―5）。すなわち、岩波「世界歴史」と「中國中世史研究」の刊行がそのような状況を反映しており、一九六〇年代を通しての研究を總括し、中國史の新たな體系的把握を目差す研究の深化が必要であるとされたのである。筆者も唐末・五代を研究する者として研究史をふり返つてみる時、同様な認識を持たざるを得ない。そう認識する一つの要因は、六〇年代後半より現在に至る間の研究成果の量的な減少傾向である。この背景には、六〇年前後の「唐宋變革」に關する活潑な研究、或いは「均田制論争」等を經過した今日、それらの成果の上に立つての新たな課題がどこに求められるべきか未だ明確にはされていない状況があると考えられるのである。本稿では戦後東洋史學界の新たな「焦點」とされてきた「唐宋變革期」をとりあげ、六〇年代を通じて諸分野の研究が蓄積された現在、われわれは唐宋變革期研究をどのように位置づけ、また何を新たな課題とすべきかについて若干の考察を加えてみたい。

戦後の中國史研究に於いて、唐宋變革期研究が周知のような活潑

な論議を呼んだのは、前田直典氏の提起（「東アジアに於ける古代の終末」歴史一ノ四）を契機としてであった。氏の中國史を世界史的觀點から捉えようとする試みは當時の歴史理論の限界性から圖式的な歴史把握となる弱さは持っていないが、中國史の再檢討が迫られていた時代にあつては非常に先進的な役割を果したのであつた。これを受けての活潑な論議の背景には、さらに二つの要因があつたと考えられる。一つは、栗原益男氏が整理された如く（岩波世界歴史6「安史の亂と藩鎮體制の展開」）、中國侵略戰爭のイデオロギー的支柱であつた「東洋社會停滯論」の批判、克服への志向であつたし、また一つには、所謂「アカデミズム」への批判を根底とし、我々の生きている現實と學問研究は不可分のものであるとする研究者の志向であり、當面する情勢と自己の研究との嚴しい對決の姿勢であつたと思う。そして、このような研究者の意識に大きな影響を与えた現實とは、巨視的には、中華人民共和國の成立であり、日本に於ける「六〇年安保闘争」の昂揚であつたであらう。

かくて、唐宋變革に對する研究は中國史を「發展」の歴史として把握する上での重要な課題となつたのであり、また、生産力の發展を背景とする人民闘争の劇期的な昂揚期の研究として位置づけられたのであつた。このように唐宋變革期研究は戦後日本の東洋史研究に對する課題意識と、研究者の直面している現實から、それらと深く結合した所で進められ、多くの成果を生み出したのであつた。

しかしながら、前にも觸れたように、六〇年代後半以降唐宋變革に關する研究は減少の傾向を示し、研究者の問題意識も分散、個別化していく状況があつたように思われる。すなわち、中國に於ける社會主義建設過程での「文化大革命」に見られるような一面的には

評價できない現實、日本人研究者をとりまく現體制の矛盾の激化とその隠蔽を意圖する巧妙な支配の進行等の反映が中國史研究にも現われているのであろう。とするならば、我々の現在の課題は現代中國が生まれ出た前近代社會のより科學的な把握であり、中國史研究に於いては、「發展」の構造をより法則的に把握し、現在の中國の姿を日本人研究者としての視點からとらえ直すことであらう。つまり、中國史の發展をとらえるという觀點から、更に一步進んで中國史の歴史展開の法則性を分析することが必要なのである。そしてこの位置づけから新たな課題が提起されねばならないのではなからうか。

現在までの中國史研究では、單に機械的な「生産力の發展」という基軸のみでは、中國史の展開は把握しきれないことが明らかになつたと思う。勿論、生産力の發展は大前提になるが、發展を抑壓する方向に存在した「東洋的專制國家」を密接な聯關のもとにとらえなければ中國史展開の十分な把握とはなり得ないのである。すなわち、基底には生産力の發展と生産關係の矛盾、その表現としての農民闘争があり、それらすべてを包攝した所に中國的な專制支配が展開したと考えられるのである。このような中國史を貫く独自の構造をいかにとらえるのか、このような意味での「國家論」の深化の必要がさけられてから久しいが、未だ明確な方向性はだされていない。谷川道雄、川勝義雄兩氏を中心として提起された「共同體論」は、この觀點から、一定の問題を含みつつも、中國史の新たな體系的把握を目差すという立場より、一つの意義を持つ提起であつたし、今後批判的に繼承すべき問題を内包するものであらう。

こう見てくる時、今後の唐宋變革期研究はどのような位置づけを

與えるべきであらうか。この時期を「中世」から「近世」への移行期とするのか、「古代」から「封建制」への轉換期とするのかは、從來から意見の對立する所である。唐宋までの支配構造を一方は「貴族制」としてとらえ、他方は「個別人身支配」という原理でとらえ、それぞれの崩壊と宋朝の支配の成長を見ようとする。けれども雙方の概念には相當の違いがあり、生産的な論争となり難い面をも含んでいた。筆者は、この唐宋・五代二百年間の所謂「藩鎮時代」を中國封建制との關連の中に位置づけ、藩鎮割據體制を統一權力との對應關係の中でとらえたいと考えている。それは何よりも中國封建制の構造をより豊かに把握するための足がかりとなると考えられるからである。ここに「變革期」としての唐宋・五代研究の意義を見出したいのである。

以下、このような觀點から、唐宋・五代政治史に關する研究をふり返り、深めるべき課題を考えてみたい。

二

栗原益男氏（前掲論文）の整理に従えば、唐宋・五代研究、とりわけ政治史に重要な意味を持つ藩鎮研究の具體的課題は次の二點であつた。一つには藩鎮權力集團の構造的特質であり、一つには藩鎮と在地とのかわりであつた。この二點を主要課題として藩鎮研究が進められてきたのである。

しかし、前にも述べたように、これまでの諸研究を通觀する時、その理論的、實證的水準は、六〇年頃までにそれまでの諸研究を踏まえて發表された堀敏一氏の一連の研究を乗り越え、發展させるまでには至っていない。無論、地道な研究が蓄積されていることも事實である。しかし、史料の制約もあつて、從來の「中世」或いは

「古代」とする視點から一步進めるまでには至っていないのが現状ではないだろうか。それ故に現在藩鎮研究の新たな課題を探るためには、まず堀敏一氏の研究成果について検討する必要がある、堀氏の研究に集約された諸研究をも體系的に位置づけておく必要があるであらう。

本論にはいる前に、唐末・五代政治史展開に關する歴史的特質について整理しておきたい。

①安史の亂以後に於ける唐朝統一權力の崩壞、五代に於ける統一權力の消失、それと共に支配機構の再編という位置を與えられながら地方毎に成立した私的權力——藩鎮が相對的に表面化してゆく。

②この地方的權力の動向には、五代に一層明確になるように、華北、華南等の地域差を抜きには考えられない歴史展開の類型が見られる。つまり華北では短命な五王朝が興亡し、華南では比較的稳定した政權が各々の支配を維持し續ける。

以上のように統一權力と藩鎮を一體のものとして考えると共に、各藩鎮に於ける地域的差異をも含み込んだ、いわば縦と横との關係を總體的に分析しつつこの時代を考えねばならないであらう。ここに唐末・五代政治史把握の手がかりがあるように思われる。

さて、堀敏一氏の研究について検討するのであるが、氏の研究は日野開三郎氏、周藤吉之氏、栗原益男氏、菊池英夫氏、等の研究を前提としているので、まずこれら諸氏の關聯する研究について觸れておかねばならない。

藩鎮研究の基礎は日野開三郎氏によって作られた。氏は、戰前より藩鎮に關する實證的研究を積重ねられ、藩鎮の政治機構、軍事機構、經濟的基盤等の側面について多くの點を明らかにすると共に、

唐朝の藩鎮への對應を税制改革などの面から追求し、「抑藩振朝」という政策的側面をも指摘した。またこれら制度史的研究に加えて、この時代の政治史的展開に對しても發言されている。すなわち唐朝による税制改革等「抑藩振朝」政策の成功という立場から、藩鎮の發展から衰退への相を時期區分されるのである。すなわち、

藩鎮は兩税法創設迄が發展時代、憲宗の改革迄が極盛時代、それ以後が弱體化時代、群雄進占の唐末はいはば變態時代、五代が終焉時代で末初が死期である（『藩鎮時代の州税三分制に就いて』史學雜誌 65—7 一九五六）。

と把握する。また、中央直屬州が唐末に減少しながらも、五代を通じて増加して行くという觀點からも、藩鎮體制崩壞への過程をあとづけられる（『藩鎮體制と直屬州』東洋學報 43—4 一九六一）。

しかしながら、日野氏の藩鎮把握は、堀氏も批判されているが、制度史等の實證的側面ではそれなりの意味を持っても、唐末變革の過程をどのような構造としてとらえるのかという問に對しては答えられない。藩鎮體制的表面に現われた歴史的變化（このような時期區分自體問題を含んでいると思うが）は何故に見られるのか。何を基軸として「發展時代」から「死期」までの展開を示すのか、が明確にされねばならない。氏の言われるような唐朝の政策を可能ならしめ、藩鎮を對象とした權力的對應を必然ならしめた構造を探る必要があるのである。

周藤吉之氏は唐末變革の中でも宋代に視點を向けつつ、五代武人支配の變質と新興勢力の成長に注目し、藩鎮支配體制を分析された（『五代節度使の衙軍に關する一考察』東洋文化研究所紀要 2 一九五一）『五代節度使の支配體制』史學雜誌 61—4・6 一九五二）。

そこで周藤氏は、五代節度使の衙軍は藩帥の家兵としての性格が強いこと、それと關聯して、唐末・五代の變革の過程で、軍隊としての「部曲」の地位が變化すること、さらにはこの底流として見られる新興勢力の成長と傳統的な貴族的支配秩序の崩壊という側面を指摘した。また一方、五代に於ける武人支配の内容を検討し、それが宋代になると郷戸にとって代られ、文臣官僚體制成立の必然性と結びつくことを分析された。

この中「部曲」については史料解釋上に問題があり、その後の濱口重國氏の研究により一層明らかにされたので、ここでは除外して考えねばならないが、五代節度使衙軍の家兵的性格、あるいは新興勢力の成長を背景とする舊秩序の崩壊という論點については、堀敏一氏にそのまま受けつがれているのである。

栗原益男氏は藩帥の權力に見られる上下の結合關係に注目し、ここに見られる「假父子的結合」を分析した（『唐五代の假父子的結合の性格』史學雜誌62—6 一九五三・唐末五代の假父子的結合における姓名と年令『東洋學報』38—4 一九五六）。そして、これらの假父子的結合は、隋末・唐初、安史の亂を中心とする時期、更に唐末・五代という「王朝支配權力の消滅期弱小化期」に集中して見られることを指摘し、また假子の類型としては、「個人型假子」と「集團型假子」があり「下剋上」と言われる唐末・五代動亂期に、藩帥個人の保身には「集團型假子」がその役割を果し、藩帥の支配權力の保持擴大には「個人型假子」がその役割を果たしたと指摘する。

また、菊池英夫氏は、禁軍の改革という側面に注目され、宋朝の統一がいかにしてなされたのかを考察された（『五代禁軍の地方屯

駐について』東洋史學11 一九五四）「五代禁軍における侍衛親軍司の成立」史淵70 一九五六）「五代後周における禁軍改革の背景」東方學16 一九五八）。この中で菊池氏は、禁軍の再編強化と共に、地方的に成立している私的權力が軍閥としての性格を濃厚に持つ故に、禁軍に編入されることによって解體されてゆく過程を明らかにされたのである。

さて、堀氏の論考の内、政治史的把握に關しては、大略以上の諸氏の研究を踏まえて立論されたものである。では、堀氏はこれらの成果の上にどのような研究を展開していったのかを見てゆきたい。

三

堀氏は数多くの論考を發表しておられるが唐末・五代を中心とする研究の骨子とも言うべき性格を持つと考えられるのは次の四論文であろう。

A 「唐末諸叛亂の性格」

東洋文化7

一九五一

B 「五代宋初における禁軍の發展」

東洋文化研究所紀要4

一九五三

C 「黃巢の叛亂」

同

13

一九五七

D 「藩鎮親衛軍の權力構造」

同

20

一九六〇

これら四論文の中、Aは安祿山の叛亂より五代に至る間の政治史的展開について、その性格を追求しつつ述べたものであり、後に、Aで述べられたいくつかの點はBCD論文でさらに詳細に検討されている。小論で主にとり上げるべきは、A、D論文の政治史的展開に關する研究である。

まずA論文であるが、堀氏はこの中で「生産關係の變化」という面からのみ支配權力のあり方を導き出すとするのではなく、それ

とは一段階はなれた所で展開する政治構造獨自の歴史的領域の展開を考えられている。氏の主張は次のようにまとめられるであろう。

①安祿山の亂の原因を考える時、社會的な矛盾の表現としての性格だけでなく、安祿山と玄宗との間にあった個人的な結合關係「寵愛」の急速な崩壊があったことを見なければならぬ。

②このような「恩寵の世界」は「生産關係の變化自體からはその影響の仕方を説明することはできない。」ものである。

③藩鎮割據體制に於いても、節度使がその軍隊の支配を維持するためには、このような個人的な結合の原理を必要とする。「下剋上の世界は頗る恩寵の世界に似ている。」

④この私的結合關係は官僚制の崩壊の結果出てくるものではあつても、官僚制を否定できないし、この關係を維持するために、藩鎮は却つて中央權力と結ばざるを得ない。

⑤この藩鎮の中央權力に對する弱點を打ち破るものが、官僚制的秩序とは直接的には無關係な民衆の叛亂——黃巢の叛亂である。

堀氏の以上の如き主張は後の論文に於いて更に發展させられている。つまり、B論文では菊池氏の研究をもとり入れつつ、五代より宋統一に至るまでの事情を禁軍の發展という基軸から分析されるし、C論文では唐宋變革に於ける黃巢の亂の位置づけを研究されている。さらにD論文ではAと關聯して、藩鎮權力の構造についてより詳細に考察し、また、前述のA論文の論點を發展させた栗原氏の研究をもとり入れて、唐宋・五代の藩鎮割據體制の展開の基底にある要素を把握しようとしているのである。それ故、まづもつてD論文での論旨の發展を見ておかねばならない。

すなわち、堀氏は「均田農民の没落」（個別人身支配）の崩壊）

から大土地所有の展開——中國封建社會の形成という經濟基盤の展開を前提として設定しつつ、

①藩鎮軍の傭兵的性格、つまり藩鎮親衛軍はもと在地農民より形成されたものではあるが、藩鎮の優遇を受けて傭兵化することにより、自らの利益を第一義として動く傭兵集團に轉化し、それ故に藩鎮の地位をも左右する存在となる。これが藩鎮支配の不安定性であり、唐朝中央權力から獨立し得ない主要な原因である。

②このような親衛軍の強大化に伴い、藩鎮は自らの地位を維持するための個人的家兵を持たざるを得なくなる。この家兵と藩鎮との關係は栗原氏が分析した「藩鎮に没主體的に服従する集團型假子」である。

③以上のような構造は唐宋の動亂期までの藩鎮權力の構造である。以後は勢力を伸張させつつある在地勢力が中央任命の貴族的藩鎮を拒否し、在地支配の實權を握り支配機構に喰ひ込んでゆく。従つてこのようにして成長した藩鎮の親衛軍との關係は、より密接なものとなり、私兵としての性格が濃厚となる。

④唐宋動亂以後、五代までに見られるこのような藩鎮と兵士との關係は、個人的ないし家父長制的結合であり、主將個人への求心的權力集中を要求するため、他集團に對しては排他的となる。これが五代の「アナーキー」、「五代亂離」の根本原因である。

⑤これら地方私兵集團は菊池英夫氏の研究にも明らかな如く、中央禁軍に編入せられることによって、地方權力は解體され、再び中央集權化されてゆく。

以上に見る如く、A論文を發展させたD論文は、すぐれて論理的なものであり、「唐宋五代政治史」を把握する上で大きな成果であ

ると言える。しかし、前述の如き筆者の問題意識からすればまだ深めらるべきいくつかの問題點も残されている。

第一に堀氏の述べるような藩鎮權力の構造は、それ自體極めて説得的なものではあるが、そこから歴史的展開としての積極性を見出すことは難しいのではないだろうか。すなわち、前述したような五代に殊に表面化する、華北、華南各々に於ける獨自の歴史展開は、堀氏の以上のような構造分析からは把握し難いであらう。それ故、堀氏は「五代亂離」という言葉で五代の「混亂」を表現せねばならなかったのではなからうか。私見によれば、南と北に代表される藩鎮動向の差異は、安史の亂終結以後一貫して見られるように思う。勿論、中央權力がまがりなりにも存在するとしなないとでは大きな違いがあり、五代のような明確な差異とはならないが、この差異は唐末藩鎮から一貫している事態のように考えられる。ここから、唐末・五代を單に「混亂」としてではなく、一つの展開の方向に沿って把握し得るように思われるのである。

第二に、右の點と關聯してとりあげねばならないのは、堀氏の方法論の含む問題である。つまり、氏は藩鎮の分析に際して、全ての藩鎮を同質のものとして分析し、各々のもつ地域的差異を捨象してしまつたのである。とりわけ氏は所謂「河北三鎮」をも含めて、他藩鎮と一律に論じておられる。この「河北三鎮」についてはすでに陳寅恪氏が種族と文化の差に注意すべきことを指摘していたし、「唐代政治史述論稿」(一九四四)、また岑仲勉氏は河北三鎮の叛亂はその土着性こそが原因であつたとされていた(「隋唐史」一九五〇)。また松井秀一氏も「盧龍軍」に限つてはいるが、その特異性をとりあげて研究されていた(「盧龍藩鎮攷」史學雜誌68—12 一九五九)。

このような早くからその違いが注目されていた河北三鎮の扱い方の例に見られるように、各藩鎮の持つ差異を捨象して、すべて一律に扱うことは唐末・五代の「政治機構獨自の展開」を把握する上で十分ではないように思われる。なによりも中央權力と各地方權力との對應を總體的に把握することが必要なのではなからうか。

こう見てくる時氣付くのは、AからD論文に發展する過程での論點の重要な變化である。つまり、A論文で述べられていた、生産關係の變化とは一段階離れた所に「政治機構獨自の展開」を考えるべきであるとする論點がD論文には無くなり、新興在地勢力が成長して五代藩鎮の權力を握つてゆくとする點に重點が移つていったことである。古代から封建制への移行期として唐宋變革期を捉えられる堀氏は、宋朝以後の中國封建社會を支えてゆく勢力の成長と、それらと權力機構との結合を見んとするに急であつたがために、A論文で重要な論點を捨て去つてしまつたと思われるのである。

以上、筆者の問題關心にひきつけて考えてきたのであるが、これらの問題を考察する一つのてがかりとなるのは「地域差」の検討であらう。つまり、唐末・五代という生産力の發展した段階に於いては在地の土地所有形態や、經營形態、また商業資本のあり方など地域的な差が非常に大きくなつていてと考えられ、必然的に藩鎮支配にも直接間接の影響を與えているであらう。それ故、支配階級内部に於ける矛盾の展開を考える際には、唐朝と藩鎮という權力内部での諸對應と共に藩鎮それ自體の内包する性格的差異に注目せねばならない。藩鎮各々は、統一權力に對する志向も一樣ではないし、河北三鎮と江南の諸鎮とを比べれば支配構造自體にも多くの相違が見られるのである。このような地域差を持つ藩鎮をその各々の志向の

相に於いてとらえ、かつ統一權力への對應をからませて考えておくことが必要だと思われるのである。ここに唐末・五代政治展開の槓桿ともなった藩鎮の役割を見なければならぬし、展開の構造をとらえねばならないと思う。

四

堀氏の研究成果の上にさらに深化さるべき点として以上のような問題があるであろう。「地域差」の問題は、中國の統一王朝が、當然のことながら、廣汎な地域的差異を包含してその上にそびえている支配機構である以上、常に問題となる。けれども南北朝以來の江南の發達により、經濟的重心が逆轉した唐末・五代にあっては從來の支配構造は重大な變革を迫られるのであり、その過程に藩鎮が出現するのである。この意味で藩鎮と地域差の問題は一層重視されねばならないと考えられる。この地域差の問題と關聯する分野でいく人かの研究者が考察しておられるので次に觸れておきたい。

西川正夫氏は、宋朝による中央集權的文臣官僚國家の形成を考えると、いう方向を持って五代十國に關する研究を發表された(①「吳・南唐兩王朝の國家權力の性格」法制史研究 9 一九五九 ②「華北五代王朝の文臣官僚」東洋文化研究所紀要 27 一九六二 ③「華北五代王朝の文臣と武臣」仁井田博士追悼論文集 一 一九六七)。西川氏は①論文では、吳・南唐兩王朝の中央權力による兵力中央集權政策の成功、武臣から文臣への比重の移動を述べ、さらにこれらの文臣は中央權力に寄生的な性格を持ったものであり、またこのような構成をもつ國家權力が取る政策は唐朝の流れをくむものであり、新しい生産關係の成長を抑壓する古い體質を持つものであると指摘する。そしてこれが南唐滅亡の内的要因であるとし、外的要因とし

て後周からの攻撃をその主たるものと考えているのである。また②論文では華北五代王朝と北宋初期の臣僚をとりあげる。そして彼等を文臣、武臣に分け、また出身地毎に分類し、その分類統計によって、五代・宋初の文臣、武臣の位置づけを試みる。ここに華北五代以來の文臣の成長を讀みとるのである。

以上の如き西川氏の華北・江南それぞれの分析は、殊に③論文に見られるように方法的にも興味深いものがあるが、しかし、當初の政治史的問題關心からすればいくつかの問題があげられると思う。

①論文で氏は、江南を中心として展開した王朝を分析されたのであるが、この分析からは、江南という經濟基盤が最も安定している地域に成立した國家としての特殊性の面での把握がもう一步明確にならないように思われる。兵力の問題や、武臣よりも文臣の比重が重いというのは、この時期に限ってみられることではなく、唐朝が既に「文臣官僚體制」と位置づけられる政策をとって江南の支配維持に細心の注意を拂っていたことからもうかがえることであるし、故に節度使の軍事力も強いものではなかった。また、國家權力のあり方が新しい生産關係の發展を抑えたという點に關しても、この時代に抑壓されたということよりも、五代に至るまでにかなりの生産力の發展があったという事實が重要なのであって、そこに成立した支配權力としてみなければならぬと思う。ここから①②論文を通じて西川氏の言われる、五代に於いては諸王朝が交代することにより支配のあり方が新しい生産關係に順應していったが、江南の王朝では支配權力が新しい生産關係への桎梏となったという見方には必ずしも同意し難い。むしろ、かような五代、江南の王朝の歴史的展

開の相違がどのような支配権力内部の相關關係によるものかについて分析することが必要となるのではなからうか。

柳田節子氏は、政治史の分野ではないが、宋代土地所有形態に關する論争に地域差の視點を導入することを主張された（『宋代土地所有制に見られる二つの型——先進と邊境』東洋文化研究所紀要29一九六三）。すなわち宮崎市定氏の主張される宋代における土地所有の細分化、零細化、佃戸の隸屬的身分關係に對する消極的評價という見方と、周藤吉之氏の大土地所有制と佃戸の隸屬身分關係の重視という見方との統一、止揚の方向として地域差を言われるのである。そして、中國に於ける「先進」と「邊境」という二つの型を考へる。その考察の對象としては、本來ならば華北と江南という二地域をとり上げるべきであるが、史料制約という條件から、荊湖、四川を邊境と見、また江南を先進として分析されるのである。この結果「先進」に於ける土地所有形態は「零細な耕地片の集積」であり、一方「邊境」では「きわめて大規模な土地所有」が存在すると等の點を指摘され、さらに、それぞれに於ける佃戸の隸屬形態の違い、農民鬭争の差異があることを推測された。

この分析は、柳田氏自身述べられている如く、多くの地域に於ける複雑な地域差を十分考慮して、統一的な歴史像を描こうとするに際しての一つの試みであり、巨視的に見た場合の「二つの型」であった。このような方法論は、史料制約はあるにしても、前に述べたような意味から重要であると考えられるが、この視點をさらに發展させるための一つの方向として、権力のあり方と結合して、全體構造の中で考えることが不可欠となるのではないだろうか。

五

以上、唐宋・五代政治史研究の一課題として藩鎮研究に位置づけられるべき「地域差」の問題を見てきたが、この視點からする研究は現在までの所、十分展開せられてはいないように思われる。最後に、谷川道雄氏の最近まとめられた著書「隋唐帝國形成史論」（筑摩書房 一九七二）に觸れつつ、藩鎮體制展開への展望を考えてみた。

谷川氏は本書の中で「先隋唐時代」と位置づけられる北朝政治史を展開するのであるが、その際「國家と民衆の連續の側面」を強調される。そしてこの主張は「中國中世史研究」の中で川勝雄氏と共に展開される「共同體論」につらなつてゆくものである。すなわち、北朝に於ける歴史展開の基軸として、胡族、漢族それぞれの貴族に代表される「共同體」の存在を指摘するのであり、そこに谷川氏の提起の新しさと意義があるのである。筆者の問題意識に照らせば、ここに言われる谷川氏の「共同體論」は非常に示唆に富むものであると思う。しかし、この「共同體」が階級關係を生み出し、それを支え、またそれを否定し、超克することができるところの、歴史の主體的要因たるものである。階級は共同體のなから、その内部矛盾によつて生み出されるがゆえに、共同體の方が階級よりも歴史的かつ論理的に、より本源的である。（『中國中世史研究』11頁 總論）

と主張されるような概念へ飛躍していくものであるならば、多くの疑問を感じざるを得ない。ただ、筆者の前述のような問題關心からすれば、所謂「中世」の國家支配の原理として、在地に密着して成立する支配、つまり貴族制と共同體との緊密な關係の存在が注目さ

れる。

この谷川氏の指摘を考える時、安史の亂後に於ける藩鎮割據體制成立期とのかんりの共通性を思わせられるのである。つまり、藩鎮的支配は唐朝の支配再編に際して、在地の再把握という役割を與えられていたと同時に、一方では、各地域の下からの要求もある程度反映したものであったと考えられるからである。勿論、藩鎮的支配はその後、憲宗の「中興」、唐朝統一權力の崩壊という過程を経て變質してゆきその中で「軍閥」としての性格を一層明確にしてゆくのであり、同時に、直接的な在地支配からも離れた權力機構と化してゆくのである。ここに宋朝權力による統一を可能ならしめた要素が秘められていたし、宋朝の支配の性格を決定する契機もあつたように思われるのである。

以上のような見通しは、唐朝統一王朝内部の矛盾の表面化から、支配の相対的重點が移動してゆく過程でもある。ここに「地域差」の問題が考慮されねばならないのである。

また、注意しておくべきは、商業資本、或いは支配權力による商

業活動の問題である。それは強大な統一王朝が成立し、その支配が維持されるためには、田賦收入のみを支配基盤とするだけでは不十分であり、何らかの形で貨幣經濟の發展に支えられねばならないからである。とすれば、各地域に於ける貨幣經濟の發展もまた、支配權力の動向と、一體のものとして検討されねばならないであろう。

以上、唐末・五代政治史研究の若干の課題について考えてみた。本稿は一つの問題提起に過ぎないが、今後、新たな方向での研究が深められることを願って筆をおきたい。

附記 本稿は一九七二年度第二回土曜會の發表に加筆訂正したものである。會の席上、貴重な御指摘を賜った佐伯富、佐藤長兩教授をはじめとする教官諸先生、並びに諸先輩、大學院生、學生諸兄に厚く感謝の意を表したい。